

『基本的な生活態度の形成をめざす指導』の研究 (六)

Ⅱ 実践の考察から得た指導の観点Ⅱ



仏性とよ子・服部 馨
稲岡百合・谷川 敬

(六) かたつける態度形成から学んだこと

かたつける態度形成という課題にとりくむまでは、教師が何かしたことに對し、子どもはどお思っているだろうか、どう感じているだろうかというようなことは、まったく考えてもみなかった。

指導案のなかの、指導上の留意点や、子どもの活動の欄を書く際、ひとつの経験活動の後には、いつも書かなければならないもの(文章の結びのようなもの)であって、最後に「かたつける」とあるのを、ひとつの形式のように考えられていた。

指導上の留意点には、いつも「皆で協力して早くかたつけるようにさせる」というように、今まではされていたのである。さらにはかたづけさせるということに、何の疑問ももたず、かたづけられない子どもがいると、この子どもは悪い子どもだと、悪いことを子どもの方にばかり、責任転嫁し、急いでその子をお呼びできて、かたづけさせたりしたのであった。このような教師のくりかえしでは、かたづけようとする態度形成が子どもの中に育っていかないのではないかと考え、とにかく実際に動いている子どもの姿を通じて、確かめていこうと思ひ、かたづけの場の記録を、とりはじめたのである。

次にあるのは、教師自身が学んだ事例のなかから、いくつかを

とり出して、並べたものである。

事例 一

子ども	教師	教師の気持
<p>(すべり台で遊んでいる)</p> <p>・遊んでいるのか、かたづけているのかわからへん。</p>	<p>あなたは遊んでいるのか、かたづけているのかどっちなの。</p> <p>おかしな人やね。自分が今何をしているのかわからへんの。</p>	<p>・他の子はかたづけているのに、この子だけどうして、ゆうゆうと遊んでいるのだろう。</p> <p>・遊んでいないで早くかたづけなさいと聞いたかったが、そう思った通りにはいえなかった。</p> <p>・自分が今遊んでいるのか、かたづけているのかわからへんて、おかしな子だな、一体どういうつもりでいったのだろうか。</p>

(考察)

○他の子どもが一生懸命かたづけているのにこの子だけすべり台

なんかに乗って遊んでいる。それも平然とした顔をして、あつかましいなと思った。そして、どうしたらこの子も他の子と同じようにかたづけるようになるだろうかと考えるよりも、この子はかたづけないで遊んでいるから悪い子だ、という考えが頭にこびりついてしまった。

○「あなたは遊んでいるのか、かたづけているのかどっちなの」といつている教師は、心の中からむらむらとわき上がってくる怒りを一生懸命沈め、顔に出さないようにして何とはなしにいった。

○かたづけさせようとすればするほど、子どもは逃げていってしまふので、かたづけさせようとしないで、自分から進んでかたづけるようにしようと思うのだが、実際になると、早くきちんとかたづいた状態にしたいという教師の気持が働き、させよう、させようとしてしまふ。

○自分が感じたこと、思ったことをそのまま口にだすと、こんな言葉は適当でないな、もっとよい言葉はないだろうかと、言葉だけを選んでいた。

○本当に感じたことを口に出せば、いくら下手な言葉でも、その気持だけは相手に通じるが、感情のない言葉、真心のない接し方では、いくらよい言葉を使っても、その心は通じないなと思った。

○子どもには、かたづけれることと遊びの区別はつけられないので

あって、かたづけれることも遊びと同じように、一つの経験、作業、活動と考えた方がよいのではないだろうか。

○遊びの時と同じような指導、配慮をすべきであると思う。

○かたづけれる時間というものは不必要であって、遊びがすんだ頃に、その玩具のしまつをすれば、即ち、それはかたづけれるといった活動といえるのではないだろうか。

感情的になり、させようとすれば、子どもはさせられまいとして逃げて行ってしまふ。だから、口先だけの言葉をえらぶことより、本心を素直に子どもにぶつつけた方がよいのではないだろうか。素直な教師の態度に接することによって、子ども自らも、素直にならずにいられないのではないだろうか。もっと子ども一人一人を大切にし、子どもの身になって、真心から、本心から、子どもに接しなければならぬと思った。また、子どもはかたづけれることがあつてしまつて、ことであるとは思っていないことに気づいた。したがって、遊びをするのと同じように考えているのであれば、遊びの指導をするのと同じような指導や配慮をかたづけれに対して、教師はしなければならぬと思った。

事例二

子ども	教師	教師の気持
<p>(一)、三人立っている</p>	<p>あんたたちのお家、きれいになった？ もうこれでいいの？ 先生こんなきたいいお家で、かなわんわ。(家の中へ入る) あれ、足にもごちそうがついてくるわ。(紙屑籠をもってくる)</p>	<p>○もうかたづいた、というような顔をしてブラブラしている。もつときれいにできないのだろうか、いらいらしてきいた。かたづいたと思つてゐるのだからか。 ○あーきたな！こんなかたづけかたしかできないなんて情ないと思わず考えた。 ○とにかく、かたづけ方がきたなかつたので、不愉快でしたががなかつた。 ○この中の一人でもめくれているふとんのこと気づいてくれないだろうか。</p>
<p>A (ごみを籠の中へ入れる)</p>	<p>あれ、赤ちゃんのおふとんめくれているわ。風邪をひかはや。</p>	<p>○こんなことも気づかないのだろうか。</p>
<p>B (ふとんをかけ直す)</p>	<p></p>	<p></p>

(考察)

○ままごこの場を見てびっくりした。おもちゃ、ごちそうに使った野菜、紙のきれはし、楽器などが、ゴザの上に散らかっている。その上、そのすぐ横にいる子は、もうかたづけいた、というような顔をしている。あーきたないと、思わず顔をしかめた。

○何よりもまず、家をきれいにしたいという考えで、一息にぐちを並べた。子どもがどうか、どうしたらかたづけられるだろうということは、頭の中にみじんもなかった。

○教師はいいたいことをいい、ままごこの場も大分きれいになって、やっと、さきほどの興奮した気持が沈まってきた。この子どもたちは、ごみは教師にいわれてかたづけたが、家の中に突っ込んであるお人形やふとんは、気がついてくれるだろうか。いやこれ位は、どうしても気がついてほしい、と思ひ少しの間待っていた。

一向にかたづけそうにない。ここでいえばこちらの負けだと思ひ、じっとこらえていたが、そのうち時間もたつてくるし、この子どもたちは、やはりかたづける気がないのだなと思つたが、教師がかけ直すより子どもにかけ直させた方が、今度からもっときちんとかけるようになるだろうと思つて、かけ直させた。

○子どもがかたづけようとする態度よりも、教師は、形の上でかたづけ、即ち、見かけさえきれいになっていればよいように

考えていた。

○子どもにしてみれば、かたづいたと思つているのに、先生はきたない、きたない、これでどこがかたづいたのと一人で怒つている。結局教師はおとなのみかたで子どもを見ていたことがまちがっていた。子どもにしてみれば、先生は勝手なものだなと、思つていたのではないだろうか。

○何だか自分が恥ずかしい。行動・言動が恥ずかしいのではない。あのときの行動・言動は、あのようにはかできなかったのである。あのようにはかできなかったという教師自身が恥ずかしいのである。

○ふだん、教育の基盤は受容である。……というようなえらそうなことをいつている自分が、実際にはこんな接し方しかできないと思つと、情なくなってしまう。

子どもは確にかたづけようとしていた。それなのに教師は、その子の態度を見ずに、教師の思い通りに道具がしまつされていかなかったことに腹立ちを感じている。かたづけるといふ態度を形成するには、道具をしまつしさえすれば（教師の思う通りにしさえすれば）よいのではなく、かたづけようとしていた子どもの姿勢を育てることであるということに気づいた。

事例 三

子ども	教師	教師の気持
<p>A (つり輪で遊んでいる) 先生、積木ぐちゃぐちゃや。</p> <p>A 積んどくわ。 A どうしたらええかな</p> <p>A そや (積木を床へおろし、あらためて全部積み直す)</p>	<p>あらほんと、積木がおちそうやね。どうしときましょ。</p> <p>どうしたらよいでしょうね。</p>	<p>○よく気のつく子どもだと思ひ、うれしかった。</p> <p>○あまりぐちゃぐちゃで、手がつけられずどうしたらよいかわからなくなり、子どもといっしょに考えた。</p> <p>○自分でかたづけ方を考え、どんだん動き出したのでほっとする。</p>

(考察)

○おおかたの子どもは、積木がぐちゃぐちゃでも、そのことさえも気づかないことが多い。が、この子はそれに気づいてくれたことが教師にとつてうれしかった。

○A児が「ぐちゃぐちゃ」といったとき、積木を直した方が良い

ように思えるのだが、さてどうしたらよいだろうか、という気持と、先生はどうだろう、先生が積んだ方がよいといえば積んでおこうかなど、子ども自身種々に考えていたように思う。

○ぐちゃぐちゃと、この子は感じたから、次の行動に移れたように思う。

○「積木がぐちゃぐちゃ」ということと、「積んでおこう」ということは、直ちに結びつかないで、教師の助言が次に出てきたことよって、積んでおこうという意識にまで発展したのだと思う。

○積木があまりにもぐちゃぐちゃなので教師自身もどこから手をつけてよいやらわからない。そこで教師も子どもも「どうしたらよいかな」と、二人で考えた。この姿勢があったから、Aが「そや」と積極的に行動に出られたのだろうと思う。

積木がきちんとかたづくことがよいのではなく、ぐちゃぐちゃであることが気になるようにならせることや、子ども自身の気持の中に、こういうときはどのようにしたらよいのか、という感情が、教師との対話によって、しだいに芽生え、育っていくことが、態度形成のために大切であり、重視されなければならぬことがわかった。

子どもの行動は活発だが、感情、判断力はゆっくりである

と思う。
ぐちゃぐちゃということと、積んでおくということが、別々のものであったことに驚いた。
ぐちゃぐちゃであるという感情を、まずもたせることが必要だと思った。

事例 四

子ども	教師	教師の気持
<p>A (ジャングルジムにのっている)</p> <p>A (うなずく)</p> <p>A (おりてくる、またのりに行く)</p>	<p>空。</p> <p>Aちゃん何しているの。何か見える。お空。</p>	<p>○他の子はかたづけしているのに、この子だけジャングルジムにのってあつかましいなと思った。</p> <p>○早くかたづけたらいいのにと、いらいらする。</p> <p>○Aはキョロキョロとして何も答ええない。しびれを切らしてこちらが答えようと思ったが、言葉が出てこない。キョロキョロとしている方をみると、ちょうど</p>

<p>B (ジャングルジムにのる)</p> <p>B お空がみえるわ</p>	<p>(かたづけ始める)</p> <p>Aちゃん、Bちゃんも何しているの。</p>	<p>空がみえたので「お空」といった。</p> <p>○Aに何をいっても無駄だなと、Aにかたづけさせることをあきらめた。</p> <p>○教師自身どこにいたらよいかわからなくなつて、仕方なくかたづけ始めた。</p> <p>○今度は二人ものつたので早くかたづけたいのにと気があせり、腹立たしくて仕方がなかった。</p>
--	---	--

(考察)

○何がみえる、といった教師の言葉の裏にはかたづけさせたいという強い気持があった。しかし直接的にいいにくく、まわり道をしていってしまった。

○お空といったのは、本心からいったのではなく、Aの答がまじきれず、どういったらよいかわからないし、何かいわなければという気もしていた。ちょうどそのとき、ふと見えた空からお空といい加減にいった。

○教師はかたづけさせたい一心でいらいらしていたが、「かたづ

けなさい」というのがなんだか悪いような気がして、無理に別のいいかたをしてみた。

教師の言葉は全部本心でなく、うわべだけのとりつくろった言葉のやりとりであったので、結局通じあうものが何もなかった。

教師は素直な本心で子どもに接していかなくてはならない。

最初教師は「指導している、教えている」という意識が強すぎ、いつも子どもよりも数段上に立って話をしていた。また言葉も見かけ上よいものばかり選んでいた。その結果表面ではいかにうまくいっているようにみえるが、子どもと教師の心はだんだん離れていってしまった。だから、うわべだけの接し方、真心の言葉ではないくらいよいことをしていても、いくらきれいな言葉を使っても、その気持は少しも相手に伝わらないということがわかった。

さらに今までは、子どもに「させよう、させよう」としてきた。

しかし、させよう、させようという考えがかえって指導の邪魔になり、子どもは反発して、教師のもとから逃げ出していくのである。ここではじめて、させようとしている教師の態度に問題があるのだと気づき、かたづけさせようとせず子どもに接しようと努

力した。

今までは何かいえば『もつと受容しなければ』『もつと一人一人を大切にしなければ』などといってきた。しかし、実際にぶつかってみてはじめて、「受容」のむずかしさと同時にその意味の深さを痛感した。即ち受容とは「そうそう」といううなずくことでは決してない。本心から、真心から、その子どもに接していることなのである。その場合、自分が子どもよりも高い所にいるのだ、自分は指導しているのだというような考えをもってはならない。常に子どもと同じ高さの所で、真心から接することが必要である。

その後、いく度も失敗を繰り返しているうちに、やがてゆったりの気持で接しようと思うようになってきた。こちらがこのように構えると、子どもにその気持が通じたのか、教師と子どもの間に結びつきができ、子どもが自分でやろうと思いつくようになる、やがて最後までかたづけられるようになったのである。とすると、子どものことを忘れ、物事や言葉の方に気をとられてしまう。でも、子どもをぬきにした言葉なり、行動なりは、それ自体少しの価値もなく、時には子どもに冷たく受けとられることさえあることに気づいた。このことにより、常に子どもを中心にして、行動をしなければならぬことが最も大切なことではなからうか。

(大津市立大津幼稚園)